

障害者の権利を守り、発達を保障するために

# みんなのねがい

5  
2025  
No.715



特集

## やっぱり楽しい！ 授業づくり

授業づくりを楽しむために

越野和之

新連載

## 教員のはじめの一步

小畑耕作

# みんなの ねがい

2025年5月号  
No.715

- 1 人として 稲塚秀孝
- 2 【インタビュー】いま語りたい心の窓を広げて 宮崎信恵
- 4 教員のはじめの一步 小畑耕作
- 6 心に種をまく 安田菜津紀
- 7 あなたに届けたいこの一冊 安達敬子
- 8 この子と歩む 三原瑞穂
- 11 進め！ 推し活道 佐々木裕都

## 特集 やっぱり楽しい！ 授業づくり

- 14 訪問学級担任としての授業づくりの根っこ 松元 巖
- 16 古典をみんなで学ぶ 久野碧衣
- 18 授業を通して、子どもたちが手を伸ばしたくなる文化との出会いをつくる 長友志航
- 20 教育実践の醍醐味を考える 山中冴子
- 22 授業づくりを楽しむために 越野和之
  
- 25 息子と歩く 千葉桜 洋
- 26 私ときょうだい 春田幸翼
- 28 子どものミカタ 安藤史郎
- 30 ソーシャルワークってなんだろう？ 木全和巳
- 34 シリーズ 18歳 佐久間 徹
- 36 暮らしの場は今 伊藤成康
- 38 実践にいかず障害と医療 安藤佳珠子
- 40 ニュースナビ 障害者の暮らしの場実態調査 周 英煥
- 42 実践の魅力 池田 翼
- 45 全障研の支部ニュース、紹介します 伊藤光子・村瀬智弘
- 46 みんなのひろば
- 47 BOOK / 編集後記



裏表紙 おいしいひととき 飯島裕美

デザイン・イラスト  
うじたなおき、勝倉大和、ちばかおり  
永野徹子、日本印刷、橋野桃子  
へむかか、山内若菜

### 表紙のこぼ

北関東のとある町の裏路地に佇む、昔ながらの青果店を営むご夫婦。さりげない紫色のペアルックから仲の良さが伝わってくる。もう何十年も二人三脚で支え合いながらこの店を切り盛りしてきたのだろう。そっと寄り添う姿に関係性やこれまでの歴史が垣間見える。

僕は小さい頃から八百屋さんが好きだった。絵本の中で見た、色とりどりの野菜や果物がとても綺麗で美味しそう。それを手にするお客さんも嬉しそうだった。もし違う人生があるなら、八百屋か漁師だな。自然の恩恵を生業に出来るって、なんか凄い。そしてそれを生涯のパートナーと共にできるなんて最高に幸せだなあ。この歳になって勝手にそんなことをふと想い耽ってしまう。



表紙=土佐和史

とさ かずふみ / 写真家。1977年大阪府生まれ。全国各地に出向き、旅ゆく道で出会ったひとや風景を撮り続け作品発表を行っている。2018年に写真集出版レーベルBUFFALO PRESSを立ち上げる。写真集に、「SUNLIGHT MEMORIES」(CITYRAT press)「北関東」「路地裏に咲いた花」(いずれもBUFFALO PRESS)がある。

# 教員のはじめの1歩

## 第2回

## 自分から食べる給食へ



全障研和歌山支部

### 小畑耕作

こばた こうさく／1951年生まれ。特別支援学校に長年勤める。退職後、元大和大学教授、現在太成学院大学非常勤講師、教員養成課程担当。

特別支援学校小学部では毎日、給食指導がとりまれます。給食調理室からのおいしそうなにおいも楽しみの一つです。しかし、楽しみでない、むしろつらい時間となる子どももいます。私のお出会った子どもの中には、偏食が多い子ども（熱々のご飯でないと食べない、野菜、果物、鶏肉など）が多くみられました。私の「食べさせられるから、自分から食べるに挑戦」の実践（『みんなのねがい』2009年4月号）を紹介します。

### 細かく刻んだ給食

転勤先で小学部5年生の担任になり、6人の子どもを3人の教員で受けもちました。カズヤ君は、自転車や機関車トーマスの絵本が大好きで、トーマスの絵を一筆で描きます。また、紙を細かくちぎり、空に向かって放り上げ、ひらひら落ちてくるのをニコニコと見ています。

給食時間になると持ち上がりの先生が、カズヤ君の給食を細かく刻んでおり、それを見ていたカズヤ君が苦虫顔になっています。その先生は、好きなものはお預け、嫌いなものをがんばったらご褒美に好きなものを食べさせる指導でした。

カズヤ君は嫌いなものは「えずき」な



特 集

# やっぱり楽しい！





# 授業づくり

新年度になりました。学校では、新しく出会った子どもたちを前に、「これからどんな授業をしていこうかな」と胸を高鳴らせている方も多いのではないのでしょうか。一方で、「子どもが乗ってこなかった」「思ったように進められなかった」と、悩みや反省が尽きないのも授業ですよね。授業づくり、楽しんでますか？ こう聞かれたらあなたはどのように答えますか。

いま、教育現場では、教員不足、教室不足、業務の多忙化など、課題が山積みです。「安全確保で精一杯」「子どもにとって意味や価値のある教育活動を考えるゆとりがない」「同僚と子どもや授業のことを話せない」そんな苦悩の声がそこかしこから聞こえてきます。でも、だからこそ、授業づくりについて考えたい。今回の特集では、きびしい現状のなかで悩みながら、しなやかに、したたかにとりくむ実践報告に学びます。

あの子のことを思い浮かべながら、同僚と試行錯誤を繰り返しながら「やっぱり楽しい！」の授業づくりの新年度にしませんか。

# 訪問学級担任としての 授業づくりの根っこ

～思いを共感できる人がいること～

東京都立特別支援学校教員 **松元 巖**



## 訪問学級の担任に

私は在宅訪問学級の担任として、児童・生徒の自宅で授業をする日々です。一回の訪問時間は2時間、午前と午後に一人ずつを担当し、自転車に教材を乗せて訪問生の自宅で授業をしています。

現在の学校に赴任するまでは、訪問学級の担任経験はありませんでしたが、担当になり早4年が過ぎようとしていきます。教員生活が25年に近づいたところでの転機で、当初は期待と不安が入り交るなかでのスタートでした。

しかし、訪問担任、学部の教員や保護者、何より担当する訪問生に助けられ、すぐに訪問学級での日々になじめました。週に2〜3回、ほぼ一人で授業を行っています。そういうわけで、訪問担任はさまざまな教科・領域の授業を担当します。手先の不器用な私は、ピアノなどの楽器の演奏、描くことなどはいろいろ苦手。時にはタブレット端末を使ったり、既製品に少し手を加えた教材を使ったりしています。移動手段は自転車为主なので、教材・教具は荷台に載せられるサイズに。学部の教員に学習グループの授業内容を確認し、訪問授業向けにアレンジ

します。1対1での授業ということも考慮しつつ、訪問生個々の実態やねらいに合わせて、教材の提示の仕方などの工夫をします。たとえば、見ることのむずかしい訪問生には、触覚や嗅覚に訴えやすいものを用意しています。

## 学校の雰囲気を訪問生にも

定期的に学校にスクーリングして、通学生との集団に参加できる訪問生もいますが、多くの訪問生は自宅での授業がほとんど。少しでも集団の雰囲気を感ぜてもらうため、オンラインを利用しての授業や行事の参加、訪問生全体でのオンライン授業を行っています。間接的な関係ですが、訪問生と学校とのつながりもてる貴重な場です。

通学生は校庭や校外に出て、直接季節の様子を味わうことができますが、こうした経験がむずかしい訪問生のために、校内に植えられているさまざまな木の果実、花を持っていくことも。色や形、触感や香りなど五感を通して、感じることで少しでも季節を感じてもらえたらと思います。

## 職員集団が支えに

# 授業を通して、 子どもたちが手を伸ばしたくなる 文化との出会いをつくる

滋賀 養護学校教員 長友志航



この年、受けもったのは小学部低学年の「知的重度」と言われる子どもたちです。生活科の授業担当になった私は、なによりも楽しいことを大前提に、身近な自然を通して学びをつくってあげたらと意気込んでいました。しかし、授業が始まってもすぐに散り散りになる子どもたちを前に、悩む日々が続きます。特に、自閉症の亮は興味の幅が狭く、なかなか実践の糸口をつかめずにはいました。

## 私がこころときめいた 文化を題材に

悩んでいた時のこと、学校の近くで大量発生した植物のガマ（＝蒲）を見つけました。その瞬間「これだ！」とビビビッときたのです。ガマの穂は衝撃が加わると爆発し、綿毛が次から次へと湧き出てきます。このガマを使って子どもたちとあそんだら、どれほどおもしろいだろうかと。調べていくと、綿が広く流通する前の布団にはガマが使われていたのだとか。だから「蒲団」という漢字があるとのこと。ちょうどその頃、国語の授業では相撲のお話あそびにとりくんでいました。「相撲といえば座蒲団」「ガマで作れば座蒲団や」と担任団で盛り上がり、

ガマを使ったあそびから座蒲団づくりへと授業の構想がつながっていきました。

実践は休み時間の中庭に、前の単元でたくさんあそんだ空気砲にガマを仕込んで置いておくところからスタートしました。さっそく見つけた子どもたちが駆け寄ります。これまで通り、空気が出ると思っていたら、大量の綿毛が噴射するものだから、<sup>な</sup>にこれ！とみんなびっくり仰天です。ガマと出会った子どもたちは、手で握って爆破させたり、空気砲で飛ばしたりしながらあそびを堪能していきました。しかし、亮だけは舞うガマを不快そうに見ながら、いつものお絵描きを続けています。

## 悔やんでも悔やみきれない あの瞬間

ある日のこと、他クラスから「吸い込むと危ないので中庭でガマを飛ばさないで」という声が届きました。担任団で相談し、座蒲団づくりに向けて、中が見える箱型の装置を作っていました。装置の両側面には手を入れる穴があり、中で安全にガマを爆発させることができました。さらに、一方の穴から送風機で風を送ると、反対側の穴からは綿毛が噴き出

# 授業づくりを楽しむために

奈良教育大学

越野和之



## 教師のしごとの今日的状況

「授業づくりを楽しもう」。そう言われて、そうだな、よしがんばろうと受けとめることのできる先生は、今日の学校にどれくらいいるでしょうか。それはそうだけれど…、と少し身を引いてしまう、そんな先生たちも多いのではないのでしょうか。

教師の働き方改革が言われて久しいですが、この間の「改革」は、ともすると単純な残業抑制、勤務時間削減となって現れ、PC端末を介した「校務支援」システムの導入とも相まって、教師をパソコンの前に縛りつけることで、授業づくりのための時間を奪う方向で作用しているように思われます。

全日本教職員組合が2022年度に行った調査（全教「教職員勤務実態調査2022」）の報告書では、先生たちの勤務時間内には「校内や出張先などで行う業務、集団で行う業

務」が優先され、それだけでほとんど所定の勤務時間に達してしまうこと、そのため、「授業の準備や自主研修などは『時間外』にあふれてしまい、自宅に持ち帰って行ったりせざるを得ない」ことが指摘されています。同じ調査の「もっと時間をかけたいと思うこと」の項目では、すべての校種で「授業・学習指導とその準備」が第一位、そう答えた教員の割合は実に8割から9割に及びます。「減らしたいこと」の第一位は「教育委員会などに提出する資料や統計、報告書の作成」でした。学級規模を縮減するとともに先生の数を増やして、教員一人あたりの担当授業数を減らすこと、煩瑣な書類の作成による管理をやめ、教員の事務仕事を減らすこと。こうした課題に手を着けなのまま残業抑制だけを強めるなら、教師は授業づくりに心を傾けることのできる労働環境を奪われ、教職は職業としての魅力を失うことになりかねません。



## 第2回

# 心の動きに目を向けて

この連載では、さまざまな実践者がそれぞれの実践を通して、子どもの発達や魅力について語ります。



大阪 安藤史郎 (あかつき・ひばり園)

### ◆染み入るように感じている心のありよう

2歳児の千沙織(ちさお)ちゃんは、大好きなお母さんがいる方を見たくてもうまく見られない、触りたくても思ったように手を動かかせないといった身体の不自由さとたたかっています。ある日の発達診断のこと。仰向けでガラガラを握っています。周囲の大人は、手、手を動かそうとすると動いてしまう足、表情を、固唾を呑んで見守っています。どれほどの時間が経ったでしょうか。カラン。ガラガラをもつ右手がかすかに動きました。しばらくの静寂の後、「あー、カランって鳴ったね」と言葉をかけます。すると、ガラガラを振る手の力強さがまた時間をかけて徐々に増していきました。その後、支座位で、机上に伸ばした両手にガラガラを持たせました。私は、千沙織ちゃんの正面でガラガラを叩き合わせたり振ったりして見せます。しばらく待っていると、うつむき姿勢の千沙織ちゃんのガラガラを持った左右の手がぐぐ、ぐぐぐつ、と正中線(身体の正面)に向かって近づいては、ぱっと開いてはなれていきます。思い通りにならない自

分に挑戦するかのようになり、何度も両手を合わせようとします。ついにガラガラが正中線上で出会った時、千沙織ちゃんからほーっとした気持ちにがにじみ出てきたように感じました。

\*

千沙織ちゃんの発達診断では、自分が外界に働きかけた結果や他者からの関わりが、時間をかけて心に染み入っていくこと、自ら外界に働きかけた手応えが、「もっともっと」と能動性をさらに膨らませていく感覚がありました。意識しないと、どうしても急いで関わってしまいがちですが、子どもからすると「今じっくり感じているのに：やろうとしたのに、待ってよ」と訴えたいこともあるのだと思います。子どもが何を感じているのかをとらえることは、お互いがわかりあえる世界を築いていく大切な時間です。ガラガラを持っていていいのか、あるいは鳴らせたかどうか、という外からみた結果だけではなく、鳴った事実を千沙織ちゃんはどう感じているのか、鳴らそうとしたその心のありようを大事にしたいと思っています。

### ◆語りたいたいことを尋ねる姿勢

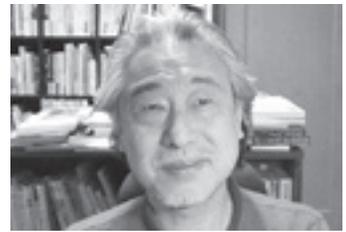
# ソーシャルワークって なんだろう？

一度しかない生活を支え、人生に寄り添い、

かけがえのない生命を共に輝かせるために

## 第2回

## 改めて、ソーシャルワーク とはなにか



日本福祉大学

### 木全和巳

きまた かすみ／日本福祉大学社会福祉学部。児童養護施設、知的障害児施設等を経て現職。研究テーマはソーシャルワーク、セクシュアリティ、権利保障など。著書に『〈しょうがい〉と〈セクシュアリティ〉の相談と支援』など

### 抵抗の余地はあるのか

昨年9月、全障研岐阜支部長で脳性マヒ当事者の小森淳子さんから次のようなメールを受け取りました。

「あるグループホームで明らかに虐待があるのに、その問題が明るみになって、グループホームが閉鎖になったりしたら、みんなの行き場がなくなるので、だれも告発しないように親同士が監視し合っているという話を聴きました。『新自由主義に抗いつつ…』と生ぬるいことを原稿に書いているうちに、みんな、パズルのようにそこに埋め込まれてしまっていたんだなど、実感します。今朝の朝ドラではありませんが、少しでもましな世の中にするために、落ち込んでいる暇はありませんが、抵抗の余地はあるのでしょうか」。

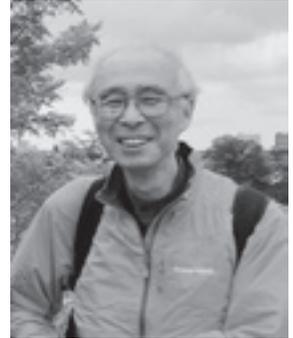
今朝の朝ドラというのは『虎に翼』（NHK連続テレビ小説）のことですね。私も、一度も欠かさず、時に泣きながら観ていました。「はて？」は素敵な言葉でしたね。冒頭のメールを読んだから、「抵抗の余地はあるのか」という小森さんの問いかけが、脳裏を駆け巡り、離れることなく私を悩まし続けています。みなさんならどう受けとめられますか？

「対話（ダイアログ）」を重視するソーシャルワーカーである私、実はこのメールを受け取った数日後に、拙いメモを送ったのですが、送った私自身にも、納得できるような言葉は未だに紡げないままです。それでも、ソーシャルワークの視点から、小森さんの問いかけに応答してみたいと思います。



## 第2回

## 惑いのなかの仲間たち



宮城 福祉型専攻科きおっちょら

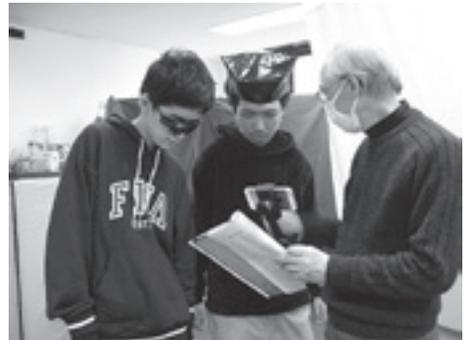
佐久間 徹

はじめに

高等部を卒業すると、青年たちは学校から社会へと踏み出していく。それぞれが、期待と不安を抱えて社会に歩み出す。福祉型専攻科きおっちょらで私が出会った仲間たちが、言葉にならない惑いと向き合い、自分の道を歩き出すときを振り返ってみたい。

映画を作りたい

Mさんは、入所すぐに、最初に「DVDを作りたい」と言った。何のことかわからないまま、2年間コロナ禍のなかで過ごし、活動報告会の時期になった。Mさんは「映画を作りたい」「アトム対ギメラを作りたい」と、話した。やっと、自分が主人公の映画を作れたのだとわかった。特撮はできないので、フィンガーチームはスズランテープを互いに持って振ることでクリアした。映画の本編ができると、オープニングと



映画を撮影中

エンディングの歌を入れたい、BGMはアンパンマンマーチにしたいなど、要求が重ねられた。DVDが完成し、ケースに入れて渡すと、Mさんは大事に持ち帰った。

一年後、自作映画第2弾「アトム対グラスキング」を作り、卒業していった。彼が「映画を作りたい」と、話すまで費やした2年間は、彼にとって必要な時間だったのだと思う。

# 暮らしの場は今

## 第2回

### 仲間が自分の暮らしの場を決める



大阪 さつき福祉会  
伊藤成康

#### 「暮らしの場がほしい」

さつき福祉会では、暮らしの場がほしいという仲間の思いや家族のねがいを受けて、1993年に吹田市内で最初のグループホーム（GH）を開設しました。2003年には障害の重い人たちが暮らせるバリアフリーの「あおぞらホーム」を建設し、夜間の複数職員配置と、訪問看護事業所と連携して仲間の暮らしと健康を守ってきました。そして2016年、最重度

の人たちの暮らしの場をつくる17年の運動が実現し、くらしの支援センター「みんなのき」を建設しました。

法人としては、吹田市内21カ所で100人がGHで暮らしていますが、平均年齢も50代後半となり、加齢とともに重症化も進み、80%が障害支援区分6の仲間たちです。

#### 「自分の口で食事をしたい」と暮らしの場を選ぶ

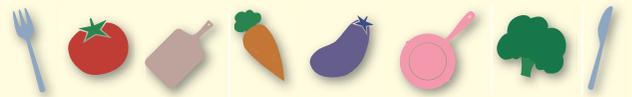
笑顔がとてすてきなトモエ

（仮名）さんは、肢体不自由児支援学校を卒業して、18歳から37年間さつき福祉会の日中の場を利用してきました。先天性の重度の四肢麻痺で、食事も排泄も全介助。体はリクライニングの車いすに固定されながら活動されていました。知的障害もありましたが、仕事への理解・認識もあり、動かせる指先を使い一生懸命作業にとりこんでいました。発語はなく、相手を見つめて目線と文字盤で会話されていました。仲間集団が大好きで、

仲間と一緒に笑い、車いすを揺らしながら全身で表現されていました。

2006年、あおぞらホームに居室の空きが出たのを機に、家族も高齢ということで応募されました。彼女自身は学校時代の先輩から話を聞き、GH生活にあこがれをもって挑戦しました。誕生日会や季節ごとの行事、休日に仲間と一緒に外出し、ホームの暮らしを楽しみました。2018年には、あおぞらホームよりスペースも広く、





HIBIKI CAFE の入口



若者たちのコーヒー淹れ方体験



フリースクールのランチ



自分たちでおやつ作り



**カフェと多様な学びの場**  
 埼玉 HIBIKI CAFE 飯島裕美

2014年4月、HIBIKI CAFE は埼玉県桶川市の閑静な住宅街にオープンしました。店内の焙煎機で生豆を焼き、ハンドドリッップで自家焙煎珈琲を提供しています。珈琲豆は焙煎後、ハンドピックでドリッップするのにふさわしくない豆を取り除いています。今年で開店から11年目を迎えます。

2024年7月、HIBIKI CAFE 内にフリースクールスコール・ムーンライト桶川カフェ学舎を開校。多様な学びの中のひとつに、若者たちとコーヒーの淹れ方体験や飲み比べなど、珈琲を共に学ぶ「珈琲学」を取り入れ、将来的には「桶川カフェ学舎オリジナルブレンドコーヒー」の販売をめざしています。

